研究科内公募プロジェクト
学校現場において心理教育的プログラムはどのように受け止められるのか―現場のニーズに即した実践導入のために―

代表　曽山 いづみ（臨床心理学コースＤ２）
鈴木 善和（臨床心理学コースＭ１）
山本 渉（臨床心理学コースＤ３）
指導教員　中釜 洋子（臨床心理学コース　教授）

問題と目的

平成23年度からの学習指導要領の改訂に伴い、学校現場においてコミュニケーション能力の育成に取り組むことが必要とされている。臨床心理学においてはコミュニケーションやソーシャルスキルを改善させるためのトレーニングや方法論が蓄積されており、心理職の立場からコミュニケーションスキルに関する心理教育実施の可能性を考えることは、学校臨床の今後の展開にも大きな意味があると言える。

一方で、心理教育を学校に導入するにあたっては様々な制約から実現が難しいことが指摘されている（中村、2009）。心理教育を導入する前段階で、学校現場のニーズと心理教育のあり方について、丁寧に検討することが必要と言える。

そこで、本研究では心理教育的プログラムが学校現場においてどのように受け止められるのか、導入の可能性と課題について検討することを目的とした。研究１として、教師を対象とした心理教育の紹介授業の実施と感想の検討、研究２として、教師・ＳＣのインタビューによる学校現場の問題意識とニーズの検討を行った。

心理教育としては、コミュニケーション力醸成のためのトレーニングとしてアサーション・トレーニングを取り上げた。アサーションとは、自分の気持ち、考え、信念などを正直に、率直に、その場にふさわしい方法で表現しようとすることであり、相互尊重のコミュニケーションについて考えたり体験したりしながら、日ごろの人付き合いを見直していこうとするトレーニングである（平木、2009）。学校現場で受け入れられやすいこと、方法論が確立していることから、本研究に適していると考えられた。

研究１　教師を対象とした紹介授業と体験の感想から

心理職の立場から公立小中学校の教師を対象として、アサーションに関する紹介授業を行った。その後教師に質問紙調査を実施し、紹介授業を教師がどのように受け止めるのか検討した。

研究１－１では、Ａ区の小中学校教師約55名を対象に、アサーションを専門とする臨床心理士による紹介授業（約２時間）を実施した。紹介授業の内容は以下の通りである。なお、この紹介授業はＡ区のプロジェクトの一環として行われ、教師が主体となって子どもにアサーションを実践できるようになるための第一歩として計画された。

① ３タイプのコミュニケーションについて考えてみよう（グループワーク）
② アサーションに関する理論的説明
③ 自己紹介ゲーム（アサーションを応用したゲーム）
④ 質疑応答

紹介授業の評価を５段階で求めたところ、授業

のわかりやすさ、参考になったかは高く評価された。前後でのアサーションへの興味は有意に増加し、今回の紹介授業が教師にとって、アサーションを知り、興味を持つよい機会になったことが窺えた。

一方、実践してみたいかどうかについては「ぜひ実践したい」が約23%、「少し実践したい」が約43%、「どちらともいえない」が約34%という慎重な姿勢が見られた。実践の難しさを感じる理由として、①具体的な実践例・方法がわからない、自分のスキル不足など【より深い理解を求める】②発達段階や攻撃性の高い子の存在などのため【子ども間で実践することに難しさを感じる】③時間不足など【物理的難しさを感じる】④ゲームなど【取り入れられそうなところから取り入れる】が挙げられ、実践にあたっては①研修、②ＳＣなど専門家の援助、③実践例・具体例が必要であることが明らかになった。学校全体での研修という形への否定的な意見も見られた。

研究１－２ではＳＣとしてＢ市小学校に勤務する筆者が、教師約30名への紹介授業を実施した。これは校内研修の一環として行われ、40分弱の時間枠であった。授業内容は１－１を短縮して行った。

ＳＣとしては、グループワークで出てきた感想と理論的説明をうまくつなげることができない、質疑応答の時間をとれないなどの反省点があった。教師側の感想としては、アサーションの興味は増加したが、時間のなさや紹介授業と実践とのつながりの分からなさが指摘された。校内研修という限られた時間の中で研修を行うことの課題が浮き彫りとなった。

研究１より、アサーションに興味を持ってもらうことと、実践してみたいと思えるようになることには隔たりがあることが示唆された。実践してみようと思えるためには、「理論を中心に扱った紹介授業と子どもに伝えるスキルが中心となるだろう現実の授業とのギャップを埋める情報」「現実の授業をするにあたって専門的知識がなくともできる実践の具体例に関する情報」「アサーションの適用範囲など実践にあたって注意を要する部分に関する情報」が必要であることが明らかになった。

研究２　学校現場における問題意識とニーズの検討

研究２－１で小中学校教師５名に、研究２－２でＳＣ３名にインタビュー調査を行い、心理教育を紹介される側・紹介する側双方の視点から、学校現場での問題意識と心理教育的プログラムの導入にあたっての課題を検討した。

コミュニケーションに関する問題意識では、教師は【自分を表現できない】子どもに対して強い問題意識を持っていることが明らかになった。そういった子どもに対して、コミュニケーションしやすい土台をつくる、自分を表現する機会を積極的に設定するなど【教師の側から働きかける】ことが当然のこととして考えられていた。一方、ＳＣの側は集団生活や言語での表現を求められる学校現場において、【顕在化しやすい問題がある】ととらえ、教師とは違う〈ＳＣとしての立場でかかわる〉ことを意識していた。これらは、教師とＳＣ双方の立場、専門性を生かした問題意識と関わりであると考えられた。

心理教育的プログラム導入にあたっては、教師は子どもへの働きかけのレパートリーを増やすために【新たな方法に興味を持つ】一方で、時間的な制約や共通理解を得ることの難しさから【導入に難しさを感じる】ことが明らかになった。ＳＣの側は、【先生に頑張ってほしいと思う】と期待する気持ちをベースに心理教育（研修）を行う一方で、教師の傷つきや人間関係の悪化につながらないように【配慮する】ことを意識していることが明らかになった。心理教育等新しい試みを積極的に受け入れる教師がいる一方で、否定的な意見を持つ教師も一定数いることが示唆された。学校現場で心理教育的プログラムを導入するにあたっては、否定的な教師への配慮等マイナス面をできる

だけ減らすことと、積極的な教師への情報提供等プラス面を増やしていくことの両面が重要であることが示唆された。また、共通理解のためには「子どもに還元されるもの」ということを伝えていくことが重要であると思われた。

総合考察

学校現場においては、心理教育的プログラムの受け入れに対し、教師間でモチベーションには差がある可能性が指摘された。短時間の研修では興味を持ってもらうことはできても、実践へのイメージはわきづらいことが明らかになった。実践導入にあたっては、プログラムの実践例や効果が具体的に見え、いい面も悪い面も含めて全体像を把握できることが必要である。そこから実践の具体的なイメージが出来て初めて、教師はプログラムの導入を現実的に検討するようになると思われる。アサーショントレーニングのような繰り返しが必要な実践では、単発的でない、日常的・長期的な取り組みが求められる。

今後の方向性としては、①学校風土に合わせたプログラムをつくっていくこと、②モチベーションの高い教師と緊密に連携をとること、③教師全体に対して段階的・継続的な働きかけを行っていくことが必要である。

参考文献

平木典子　2009　改訂版アサーション・トレーニング―さわやかな〈自己表現〉のために―　金子書房

中村豊　2009　学校に「心理教育」を導入する際の留意点　児童心理　pp. 35-41.